

『 日本流で学ぼう！！ パラグアイの私立学校 』

【第1回パラグアイ便り】の中で、当地では日本移住者の存在感の大きさから日本に対する親しみや敬意が格別だという話がありましたが、これは教育面にも現れています。

パラグアイで日本語・日本文化に関する教育を実施する教育機関には、①日本政府認定の日本人学校、②各移住地を中心に日系人によって運営される学校、そして③パラグアイ政府認可下の私立学校の3種類があります。①は駐在員子弟向けの日本の正規学校、②は移住地日系人子弟向けの補習校ですが、本稿ではもっぱら現地人(パラグアイ人)が通う③パラグアイ政府認可下の私立学校について触れることとします。

これらの学校は、日本人や日系人子弟のみを対象に門戸を開いているわけではなく、ごく一般的なパラグアイの子どもたちに対して、パラグアイと日本式の教育を掛け合わせること、より豊かな教育を行い、それぞれの学校が掲げる教育目標を達成することを目指しています。もちろん大多数の生徒はパラグアイ人です。

《 三育学院 (コレヒオ・アドベンティスタ) 》

1973年設立のアスンシオンの日系学校の草分け的な学校であり、セブンスデー・アドベンチスト教会の理念に基づきながら日本文化・日本語教育を含む授業を、幼稚園から高校課程まで実施しています。

同学院には日系人子弟が共同生活を通して学ぶ学生寮も存在します。卒業生の中には、アスンシオン国立大学をはじめとしたパラグアイを代表する大学その他、チリやアルゼンチンの大学へ進学し、医療や教育分野に進む卒業生も多くいます。

また、同学院と同じ敷地内には、コレヒオ・アドベンティスタ(コレヒオは「学校」を意味する)が同じく同宗教の理念に基づいた教育を実施しています。同学校のカリキュラムには、日本文化・日本語教育は組み込まれていないものの、同じ敷地内にある



(校章)

三育学院と協力して学校運営を行っており、約 350 名が通っています(三育学院での午前授業を終えた日系人子弟の多くが午後と同校に通っています)。その他にも、ブラジル、コロンビア、台湾、韓国といった国籍の生徒も通っており、国際色豊かな校風となっているのが特徴的です。



(インターナショナル・フェスティバル)

《 ニホンガッコウ 》

1993 年、元国費留学生(教員研修留学、横浜国立大学)のアルバレンガさんが、日本滞在中に日本式の教育に感銘を受けたことから、夫のオルテガさん(元下院議員)と共にフェルナンド・デ・モラ市(アスンシオン中心部から 30 分)に設立しました。同校の校章には、日本とパラグアイの国旗の他、ひらがなとアルファベットで「がんばってください・GANBATTEKUDASAI」というスローガンが掲げられています(写真参照)。

現在では、幼稚園から大学(ニホンガッコウ大学)までを備えており、約 2200 名が通っています。同校は、パラグアイ国内の各種スポーツ大会やダンスなどの芸術コンクールにおいて優秀な成績を収めている他、ラテンアメリカ各国からの代表校が参加する「ラテンアメリカ・サイエンス・エキスポ 2014」にパラグアイ代表校として参加し、見事優勝しました。

小学校から高校課程では、日本語教育及び日本文化に関する授業を必須科目として 40 分/週が行われているのみならず、日本文化に関する課外活動として、空手、日本舞踊、よさこいといったクラブ活動が活発に行われています。また、同校には国内外のメディアが度々訪れ、とくに全校生徒が朝礼で日本国歌を歌っている学校(!)として、その様子が日本のメディアでも紹介されました。学生や保護者の日本への訪問を通して直接日本の学校との交流も行っています。



(校章とスローガン)



(日本人講師を迎えての着付けレクデモ)

《 サクラ日本教育学院(サクラガッコウ) 》

1998年、元国費留学生(千葉大学大学院研究留学)のオレゴさんが、夫のハラさん(JICA 技術研修生で日本での勤務経験も長い)と共に設立しました。両名とも日本の理系大学で学んだものの、パラグアイへ帰国後、「教育」こそパラグアイが最も必要としているものであると考えて専門外である「教育」の道を志し、日本で培った経験を基にリンピオ市(アスンシオン中心部から40分)において同学院を設立しました。



(校章)

同学院は、小中高一環教育を実施しており、約350名が通っています。最近では同校の評判を聞きつけリンピオ市外からも生徒が通っています。また、卒業生の中には、パイロットを目指し養成学校に通うなど、志の高い若者を輩出しています。選択科目として、日本語及び日本文化に関する授業が40分/週、実施されている他、校舎の入り口には日本の学校で見られるような下駄箱が設置されており、外履きと上履きを使い分ける取り組みが行われています。また、保護者も含めた運動会(ムカデ競争や玉入れ等)を行うなど、様々な状況において日本の伝統的なアイデアを盛り込んだ活動を行っています。



(運動会での一コマ:ムカデ競争)

《 日本パラグアイ学院 》

2001年、各種日系団体と日系有識者が主体となって幼児から高校課程までの一貫教育を行う学校として設立され、約300名が通っています。現在は、トヨタ駐日パラグアイ大使(若くしてパラグアイに移住しビジネスで成功を収め2009年12月に大使就任)のご子息が日本パラグアイ学院基金の理事長を務めています。スペイン語による授業が主体ですが、日本語の授業も必須科目になっており、16時間/週もの日本語や日本文化に関する授業が行われています。これらの授業のおかげで、児童・生徒は日本の歌を合唱し、太鼓の演奏を行うことができ、また



(校章)

最近では、日本語能力試験2級の合格者を2名輩出するまでに至っています。前述の3校に比べ、まだ若い学校ですが、卒業生の多くが、アスンシオン国立大学、私立カトリカ大学というパラグアイのトップレベルの大学に進学しています。

その他にも、学校敷地内において、ウサギやカメといった動物を飼育し、野菜や果物を栽培するなど、日本の理科教育を想像させるような教育が実施されています。また、日本への修学旅行も実施しており、日本の学校との交流も継続的に行っています。



(日本への修学旅行)

以上、4校の概要について述べてきましたが、冒頭でも述べたように、ニホンガッコウ、サクラ日本教育学院、日本パラグアイ学院は、それぞれに「日本」といった冠が校名についているものの、パラグアイのその他の一般的な私立学校と制度上は何ら変わりありません。また、三育学院と共同運営を行うコレヒオ・アドベンティスタにおいても、多くの日系人子弟が非日系の子どもたちと学んでいるものの、他の私立学校と変わりありません。

ただ、これらの学校では、元国費留学生や日系教師を含む日本にゆかりのあるパラグアイ人が教員としてそれぞれ特徴のある情熱的な指導を行っていることが印象的で、彼らの後輩達が今後ともこうした精神を後世に引き継いでいってもらえることを期待してやみません。



(元国費留学生が指導するよさこいクラブの演舞)



(日系人教師による日本語の授業)

(小島利治 大使館 2015年4月)

【編集後記】

当国は一人あたり GDP が 5000 ドル弱と、中南米諸国でも貧しい国で、とくに教育分野での国の施策は近隣諸国に比べ著しく遅れていると言われてきました。日本政府・JICA もこれまで教育分野を重視して、ヒト(JICA 専門家や協力隊)・物(校舎建設や教材提供)・知識(文科省国費留学生や JICA 研修生)など幅広い分野で支援してきました。

たとえば草の根無償案件としては、1989 年以來 200 件を超える校舎建設などの教育関連支援を実施し、各日本人移住地はもとよりパラグアイの全国的な規模で幅広く教育活動を支援してきました。



(草の根無償調印式で挨拶する教育大臣)



(公邸茶室での本文記載4校幹部の皆様)

この、日本で学んだ多くの留学経験者(2015年4月現在で国費留学生総勢166名、内44名は教育関連です)には、日本の教育理念に啓発され、その専門分野の知識の活用にとどまらず、日本での教育精神も当国に根付かせようとする人達があります。

今回ご紹介した学校では、経営者であれ、教師あれ、日本の学校に負けない教育・人造りを目指しており、こうした方々の熱意あふれる姿勢に接すると、日本人として感慨深い物があります。

1936年にアスンシオン南東130キロに位置するラ・コルメナに最初の日本人が入植して以来来年で移住80周年を迎えますが、ここで紹介したような形での日本の存在感もまたこの国ならではの独特の文化であり、こうした未来に繋がる絆を大切にしていくことも我々の責務と考えています。

(上田善久 大使館)